
一人だけのアイドル

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一人だけのアイドル

【Nコード】

N7668D

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

ずっと引退したアイドルのファンであり続けている孝司。その彼があるゲームショップに入るとその店員がそのアイドル奈月だった。さあどうなるか。ほのぼの系のお話です。

第一章

一人だけのアイドル

中根孝司にはずっと応援しているアイドルがいる。それは子供の頃からであり大学生になった今でも変わりはない。彼にとっては永遠のアイドルである。

しかしそのアイドルのことを言うとは皆は笑う。それにははっきりとした理由があった。

「もう引退しているじゃないか」

「なあ」

理由はそこであつた。既に彼が応援しているそのアイドルはもう引退しているのだ。しかも彼がその子供であつた頃にである。

「それに子供だったし」

「少しでも活動しただけだろ？」

「それでもだよ」

だが彼はここで皆に対して反論するのだった。それは常だった。

「俺は彼女が一番なんだよ」

「一番なのかよ」

「そうさ、一番さ」

それをまた言う。あまり大きくない身体を無意識のうちに背伸びさせてそのうえで赤い顔をさらに赤く、大きい目をさらに大きくさせて主張するのである。

「俺にとつてはだけれどな」

「一途だねえ」

「けれど彼女ってあの頃はまだ」

ここでアイドルに詳しい友人が言うのであつた。

「子供だったじゃないか。年齢的には御前と同じ位だろう？」

「ああ、同じ歳だよ」

そうその友人にも答える。

「それがどうかしたのか？」

「いや、何ていうかな」

ここでその友人は微妙な顔になって腕を組んでからまた述べてきた。

「あれだろ。やっぱりアイドルにしる女優さんにしる年上に限るよ」

「御前年上の人ばかり見るな」

孝司も彼の趣味は知っているので少し呆れた顔を見せた。

「好きだよな、本当に」

「年上の人ってのは優しいんだよ。それにリードしてくれるし」

案外甘えん坊のようである。楽しい笑顔がそれを教えていた。

「だからいいんだよ。御前にはそれがわからないみたいだな」

「悪いけれどな。俺はあの娘だけさ」

そう答えるのであった。

「今でもな」

「これからか？」

「ああ、これからもさ」

またはつきりと答えてみせた。

「だからな。他のアイドルも嫌いじゃないけれど」

「本命じゃないってか」

「本命はいつも一人さ」

続いてこう述べてみせた。

「何時だってな」

「俺だってそうだけ」

その年上好みの友人も孝司に言ってきた。

「いつも見ているのは一人さ」

「あれか？吉川先輩」

「そうさ、あの人さ」

水泳部の先輩である。彼はその先輩に入学の時から参っているのである。

「俺はあの人と一緒にいられるから今最高に幸せさ」

「まあそれならそれでいいけれどな。じゃあ今日は御前は先輩とデ
ートか」

「そうのもりさ。御前はとうするんだ？」

「俺は。そうだなあ」

彼に問われて孝司は少し考える顔になった。それからまた言うの
であつた。

「とりあえず何もすることがないし」

「ゲーセンか本屋でも行くのか？」

「それもいいな。ただ、暇だしなあ」

その暇にかまけてふと考えることは。

「渋谷にでも行くかな」

「渋谷かよ」

「ああ。何か面白いものがあるかも知れないしな」

首を回して考える顔をしていた。

「とりあえず行つてきてみるよ」

「原宿はどうだよ」

「あそこでも最近何かあるか？」

「あることにはあるんじゃないのか？」

少しあやふやな返答であつた。

「あそこはいつも何かやってるしな」

「それはそうだけれどな。けれどな、何かな」

ここで孝司は微妙な顔を彼に見せるのであつた。

「今は渋谷に行つてみたいな」

「そうか。まあそこところは好きにするんだな」

彼の返事は素っ気無いものであつた。

「俺が行くわけじゃないしな」

「結局それかよ」

「まあ渋谷も悪くはないな」

しかし一応はこうも述べてみせてきた。

「変な奴も多いけれどな」

「まあそうした奴には関わらないようにしてるさ」

これは心得ていた。東京にも色々な人間がいる。それはわかって
いるから彼も用心はしているのだ。さもないと東京は結構危ない街
になってしまふのだ。彼等にとつて。

「そういうことでな。それじゃあな」

「ああ。何かあつたら教えてくれよ」

そう言葉を交えさせてから孝司は渋谷に寄るのであつた。渋谷は
いつも通りで何の変わりもない。さしあたってこれといった目立つ
ものを見つけないまま彼は時間を潰した。その中でふと立ち寄った
ゲームソフトショップに入った時であつた。

第二章

「いらっしやいませ」

店員の声が聞こえてきた。その声は女の子の声だった。

「あれ、アルバイトの娘かな」

孝司はその声を聞いてふと視線をあげた。するとそこには。

「えっ、嘘だろ!？」

「どうもおかいあげ有り難うございました」

明るい笑顔で客に応対している女の子を見て驚いた顔と声になっていた。何とそこにいるのは。

「まさかな。いや」

しかし彼は自分の記憶を疑うことはできなかった。それに考えもそう、目の前にいる彼女は間違いなく。それを悟って彼はカウンターに立っている女の子のところに向かった。周りの棚にはゲームソフトが並べられカウンターの後ろには広告やポスター、ゲーム機等が置かれている。渋谷にあるのが相応しい店の雰囲気であった。

「あの」

「はい」

女の子は彼に顔を向けてきた。その顔はやはり彼の知っている顔であった。丸くて大きな目に白い明るい笑顔。赤くて薄い唇に黒くお団子にした髪。髪型だけは記憶とは違うがそこにある顔は間違いなく彼がいつも知っている顔であった。

「霧生奈月さんですか？」

「えっ!？」

彼女もその名前を聞いて驚いた顔を見せてきた。

「どうしてその名前を知っているんですか？」

「やっぱり」

彼は彼女のその驚いた顔を見て確信した。やはり彼女だったのだ。「まさかとは思ったけれど」

「あの」

彼女は驚きを隠せないまま彼に言葉を返した。

「今バイト中ですので」

「あつ、そうですね」

言われてそのことを思い出した孝司であった。

「すいません。それじゃあ」

「お話は後で」

そう言つて話を中断するのであった。

「二時間したら終わりますから。その時に」

「その時につて」

「お話あるですよね」

その彼女の方から言つてきたのであった。

「それじゃあその時に。それでいいですよね」

「はい。それじゃあ」

何が何だかわからないまま話は動き孝司は彼女と話をすることになった。二時間後に彼が店に行くと言ふ制服姿の彼女がそこにいるのであった。

その制服はグレーを貴重として赤いリボンと白、黒が目立つ可愛いデザイン制服であった。特にスカートのふわふわした感じが彼女に似合っていた。少なくとも彼女から見ればそうであった。

「お待たせしました」

「はい。それでですね」

「あの」

また彼女の方から言つてきた。

「お店じゃ何ですから。歩きながらでよかったです」

「ええ、こちらこそ」

また彼女の言葉に応える。話は完全に彼女のペースで進んでいた。お店を出て渋谷を歩きながら話をする。二人共制服姿ですので渋谷にいても全然おかしくはない格好だった。しかし彼にとっては今は説得別だった。何故なら彼女は。

「あのですね」

「何でしょうか」

また彼女の言葉に応える。

「私は。霧生奈月じゃなくて」

「そうでしたよね。山田奈月でしたよね」

彼はそれもわかっていたのだ。

「そちらが本名でしたよね」

「はい、そうです」

彼女、奈月も孝司のその言葉に頷くのであった。

「それも御存知なんですか」

「だからファンなんですよ」

孝司はまた笑って彼女に言うのだった。

「霧生奈月さん、いえ山田奈月さんの」

「けれど私はもう芸能界にはいないんですよ」

彼女は断るようにして彼に告げた。

「それでファンなんて」

「どうして引退されたんですか？」

彼は不意にそれを問うのだった。それもかなりダイレクトに。

「これからどんどん人気が出た筈なのに」

「中学校に入学するんで」

孝司のその問いに対してこう答えてきたのだった。

「それでなんです」

「中学校に入学するから？」

「入学する中学校が厳しい学校でして」

それもまた孝司に告げた。確かにそうした学校もある。理由とし

ては充分なものであった。

「だからだったんです」

「それで引退されたんですか」

「正直引退しても未練はないです」

彼女はこうも言った。

「芸能界には憧れていましたし今も嫌いではないですけど」

「あれですか？もっと好きなものがあるとか」

「そうです。それが今です」

今いる時間がそうだと。言うのであった。

「今は充分楽しいですから。それで」

「いいんですね」

「すいません。だから」

「だったらそれでいいです」

ここでの孝司の言葉は奈月にとっては思いも寄らないものであった。ここでは是非復帰してくれと言ってくるものだと思っていたのだがそうではなかったのだ。

「それでいいです」

「いいんですか」

奈月は意外といったその感情を隠せないまま応えた。

「それで」

「だって。芸能界にはもう興味がありませんよね」

「はい」

それをまた告げるのであった。

「そうです。小学校の時だけでもう」

「だったらいいです。もうそれでいいじゃないですか」

孝司の顔が穏やかな笑みになっていた。その笑みで奈月に対してまた言うのであった。

「それはそれで」

「ですか」

「僕はそうなんですけれどね」

「もう私はチャイドルじゃないのに」

古い言葉だがそれでもあえてこれを使うのであった。これは奈月が実際にこう呼ばれていたからである。それを使ったのである。

「それでも」

「僕がファンだったのはアイドルだったからじゃないんですよ」

孝司の言葉はこうであつた。

「アイドルだつたからじゃなくて」

「そうなんですよ。ほら」

渋谷の街には多くの制服の女の子がいる。日本にいていいことはかなりの割合でその制服の女の子達が可愛いということである。

奈月もまたその一人である。

「アイドルっていつでも色々いるじゃないですか」

「ええ」

これは本当にその通りだ。アイドルと言っても様々で一人だけではなくそれこそアイドルの数だけいるのだ。それは奈月もわかつていた。

「だつたら」

「だつたら？」

「僕はそれでいいんですよ」

「何かよくわからないんですけれど」

奈月は歩きながら首を傾げた。首を傾げるその姿が左手にある店のショーウィンドウのガラスに映っている。その首を傾げる姿が。

第三章

「それでいいって」

「だから。芸能界にいらなくてもいいじゃないですか」

孝司はそれに応えてまた言ってきた。

「別にそれでも」

「いいって。あの、やっぱり」

「別に芸能界にいてもいなくてもいいんです」

孝司は今度はそれをはっきりと告げてきた。

「ただ。そこにいてくれれば」

「私がいるだけですか」

「それじゃあ駄目ですか？」

あらためてそれを彼女に尋ねるのであった。

「僕のアイドルで」

「そうですね」

奈月はそれを言われてまた微妙な顔を彼に見せてきた。その顔もまたガラスに映っている。だが孝司はガラスに映る顔ではなく彼女の顔を直接見ていた。

「あの、お答えすることは」

「勿論ですよ」

孝司はまた言う。

「誰にも言いませんよ。山田さんがアイドルだったってことは」

「それは有り難うございます」

正直なところ自分が元アイドルだったと周りに言われるのは避けたいと思っていたのだ。だからここでの孝司の言葉は有り難かった。

「それは」

「ええ。それで」

それを話したうえで彼はまた言ってきた。

「アルバイトしているお店ですけれど」

「はい」

話はそこに移るのであった。

「またお邪魔していいですか」

「お店にですか」

「駄目だったらいいです」

もう渋谷の駅が見えてきていた。ハチ公やモアイの像が見える。

それ等を見ていると本当に渋谷に来ているという気持ちになるのであった。

「それはそれで」

「いいですよ」

だがここでの奈月の返事は。にこりと笑ったうえでの言葉であった。

「えっ!？」

今の奈月の言葉は孝司にとっては意外なものだった。従って今度は彼が驚く番であった。また店のショーウィンドウのガラスに彼の顔が映っていた。だが彼はその顔を見てはいなかった。彼は奈月の顔をじつと見ていたのだ。そのうえで声をあげたのである。

「今何て」

「ですから。どうぞ」

またにこりと笑って告げるのであった。

「何時でもいらして下さい」

「わかりました。それじゃあ」

彼は慌てたような笑顔でその言葉に応えるのであった。

「明日にでも」

「はい。どうぞです」

こうして二人は何時でも会えるようになったのであった。それから孝司は変わった。学校からの帰りはいつもつきつきとして渋谷に向かうのであった。

「何か最近の御前な」

「いつもと全然違うよな」

「ちょっとな。いいことがあったんだ」

彼は笑いながらクラスメイト達の問いに応える。その下校時間に。
「それでね」

「いいことって何だよ」

「彼女でもできたのかよ」

「そうも言うかもな」

笑いながらそれを否定しないのであった。

「まあ言うならあれだよな」

「あれって？」

「何なんだよ」

「アイドルだよな」

また笑いながらの言葉であった。

「あえて言うのなら」

「おいおい、まさかそれって」

「浮気ってやつかい？」

彼等はそれを聞いてからかって言葉を返す。まさか奈月と会ったとは夢にも思っていない。真相は孝司だけが知っていることであった。

「まあそうかもね。強いて言うなら」

「強いて言うなら？」

「僕だけのアイドルかな」

格好のいい言葉になっていた。

「彼女は」

「何か羨ましいな、今の言葉は」

「ああ」

「それじゃあ。そういうことでね」

ここまで言うとお鞆を手に取った。後は帰るだけであった。

「今からちょっと。行って来るから」

「ああ、それじゃあな」

「嫉妬しちまうがな」

彼等のやつかみ半分の言葉を聞きながら渋谷に向かう。彼だけのアイドルがいる場所に。まさか彼女が本当に元アイドルだとは誰も思わないが彼にとってはそれはどうでもいいことになっていた。それは何故か。言うまでもなかった。そのままの彼女が最も好きだったからだ。

一人だけのアイドル 完

2008・1・14

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7668d/>

一人だけのアイドル

2010年10月8日15時22分発行